

カナダの同時バイリンガルの子どもの文内コードスイッチング

時田 朋子
(東洋大学文学部)

要 旨

生まれてから同時に2つの言語に接触した「同時バイリンガル」と呼ばれる子どもたちが、一文の中に二言語が出現する「文内コードスイッチング」をいかに行うか、その特徴を分析した。分析には、1990年代から今日まで拡大されてきた発話プロセスモデル (Joshi, 1985; Azuma, 1993; Myers-Scotton, 1992) の枠組みを用いた。被験者はバンクーバーに住む4家庭6人の学齢期前後である日本語と英語の同時バイリンガルの子どものデータは家庭における家族間の自然会話から構築したコーパスである。その結果、①文内コードスイッチングが起こる比率は低い、②言語の組み合わせは、日本語が基盤となる文 (ML) に英語語句が挿入される (EL) パターンがほとんどである、③ELの方がELの島より多い、④EL・ELの島は、名詞・名詞句であることが多い、ことが見出された。

1. はじめに

2つの言語の能力をもつバイリンガルは、一文の中に二言語が並置される「文内コードスイッチング (Intrasentential code-switching)」を頻繁に行うといわれる。たとえば、日本語と英語のバイリンガルの子ども¹は、以下のような文を発する。

(1) 先に close しちゃった。

(2) You need おはし？

両文とも、一文の中に日本語と英語という二言語が使用される、つまり文内コードスイッチングが行われている。しかし、文として成立している。

本研究は、誕生してから2つの言語に同時に接触することによりバイリンガルとなった(以下では「同時バイリンガル」と呼ぶ) 子どもたちが発する文内コードスイッチングの

¹ 本研究の被験者の発話である。

特徴を分析する。同時バイリンガルは、二言語が混合する言語体系 (Grosjean, 1992) の中で二言語の能力を発達させている (Genesee, 1989; Meisel, 1989) と近年では考えられている。それでは、この子どもたちはどのように言語を使用するのであろうか。本研究はバイリンガルの特徴的な発話のひとつである文内コードスイッチングに焦点を当てる。これまで行われてきた文内コードスイッチングに関する研究は成人を対象とすることが多く、数は少ないが同時バイリンガルの子どもを対象とする場合も第一言語習得期に相当する2-4歳の子どもの中心であった (ex. Yip & Matthews, 2007)。そこで本研究は、学齢期前後の同時バイリンガルの子どもを被験者として分析することとする。

2. 先行研究

文内コードスイッチングは、これまでのバイリンガル研究において熱心に取り組みられてきた課題のひとつである。1970年代までの多くの研究は、コードスイッチングの意味や機能に着目してその特徴を分析していた (Jacobson, 1998)。この頃は、コードスイッチングは文内のどこでも起こると考える研究者もいれば、なんらかの制約を受けながら起こると考える研究者 (ex. Pfaff, 1979; Kachru, 1982) もおり、文内コードスイッチングに関する研究者の立場はさまざまであった。なお、後者が論じた「制約」は文法的観点から議論されることが多かったが、制約の示唆にとどまっていた。たとえば Pfaff (1979) は、時制やアスペクトに関する制約、語彙的、構造的な制約を、例文とともに記述している。

コードスイッチングを統語構造から捉えることにより記述的な分析から脱却したのは、Poplack (1980) の等価制約である (cf. Poplack, Sankoff, & Miller, 1988; M'Barek, & Sankoff, 1988; Poplack & Meechan, 1995)。その後、GB理論を用いたモデル (ex. DiSciullo, Muysken, & Singh, 1986; Woolford, 1983) が、そして1990年代には発話プロセスからコードスイッチングを捉えるモデル (ex. Myers-Scotton, 1992; Myers-Scotton & Jake, 1995, 2001; Azuma, 1993, 1998) が提唱され、文内コードスイッチングに関する多様なモデルが提示された。今日このように多くのモデルが提唱され一致を得るに至ってはいないが、文内コードスイッチングがなんらかの規則や制約に基づいて起こるという点において、ほとんどの研究者は一致している (ex. 東, 2009)。

本研究は、ある言語の文に別の言語の語彙や句が挿入されることを「コードスイッチング」と捉える発話プロセスモデルを用いて、学齢期前後の同時バイリンガルの子どもたちが発した文内コードスイッチングを分析することとする。発話プロセスモデルは日本語と英語のように文法構造が異なる点が多い言語間のコードスイッチングを説明することが可能であるとともに、1990年代以降今日まで支持されているモデルであるからである。

発話プロセスを文内コードスイッチングの説明に導入したのは、Joshi (1985) であった。Joshi (1985) によると、文内コードスイッチングは、二言語のシステムが同時に活性化され、二言語間の体系的な相互行為が行われた結果として生じたものである。しかし、文における二言語の統語的な機能は対等ではなく、文を構築する「基盤言語 (matrix language)」と文に埋め込まれる「埋め込み言語 (embedded language)」に区分される。また、限定詞、数量

詞、前置詞、時制を示す形態素、助動詞、補文標識、所有格などの「閉じられた文法項目 (closed-class items)」は、それのみでは埋め込まれない。

その後 Azuma (1993) は、Joshi (1985) の仮説にユニリンガルの発話プロセスを説明した Garrett (1982) のモデルを組み合わせて、「フレーム内容仮説: Frame-Content Hypothesis」を提唱した。Azuma (1993) によると、発話は2つの段階を経て実現される。第1段階はフレームの構築であり、文の骨組みを作る「閉じられた文法項目」が語順に従って配置される。次の第2段階では、第1段階で構築されたフレームに、「開かれた文法項目 (open-class items)」である内容語が挿入される。この項目はフレームと同じ言語である場合と、異なる言語である場合がある。この後者、つまりフレームに用いられた言語と異なる言語で開かれた文法項目が挿入されることを、Azuma (1993) は「コードスイッチング」と捉える。そのため、挿入可能な品詞は名詞や形容詞、動詞などの開かれた文法項目のみであり、第1段階でフレームを構築する閉じられた文法項目は、コードスイッチングされない。このような2段階を経て文は生成されるが、逆に言えば、この2段階を経なければ文は生成されない。なお、この2つの段階はこの順で踏まれなければならない、いったん第2段階に進むと第1段階には戻れない。

ここで、フレーム内容仮説は、いわゆる「借用」について言及していないことを指摘しておきたい。「コードスイッチング=挿入」と捉えるモデルであるため、この区別を必要としないからである。挙げられた例文においても、Poplack (1980) などこれまでのモデルが「借用」と捉えてきた、1語のみの名詞や形容詞をコードスイッチングの単位として扱っている。

さらに Azuma (1998) は、単語ではなく、チャンクを単位として言語が埋め込まれることを論じている。そして、挿入されるそれらの語句は自立的に意味をもつまとまりであり、そこからコードスイッチングには「自立の原則 (stand-alone principle)」が適用されると述べる。「自立の原則」とは、「話し手の頭の中で意味的に自立する要素であるチャンクは、コードスイッチングされうる (A “chunk”, any segment which can meaningfully stand alone in the speaker’s mind, may be code-switched.)」(p. 114) ことである。話し手は、談話の一貫性や意味の維持を意識しながら発話をする。文はチャンクが連ねられて生成されるが、意味的な一貫性を維持するためには、フレームとは言語が異なるにせよ、チャンクは意味的に自立していなければならない。そのため、接続詞・付加疑問などのディスコースマーカ、イディオム・慣用句・引用表現、名詞・形容詞・動詞・副詞のような語彙項目はもちろん、前置詞句・名詞句のような句も、自立的な意味を持ちチャンクを構築するのであれば、フレームとは異なる言語で挿入されることが可能となる。しかし、冠詞・前置詞・数量詞など自立的に意味をなすことができない項目は、別の言語で挿入することが不可能であり、コードスイッチングが起らない。

Myers-Scotton (1992) も発話プロセスの観点から「基盤言語フレームモデル (Matrix Language Frame Model): MLF モデル」を提唱し、文内コードスイッチングを説明している。

MLF モデルには、大きな特徴が2つある。ひとつは、Joshi (1985) の概念を引き継ぎ、文内コードスイッチングに使用される二言語を、文の枠組みを構築する「基盤言語 (Matrix Language): ML」と、MLに挿入される「埋め込み言語 (Embedded Language): EL」に区分

し、文において二言語が対等に機能しないことを明示したことである。

もうひとつの特徴は、文で使用される形態素を、「内容形態素 (content morpheme)」と「システム形態素 (system morpheme)」に区分したことである。内容形態素とは主題的役割を与えて受ける形態素であり、システム形態素はその逆で主題的役割を持たない、接辞などの形態素である。形態素を用いて主題的役割の有無による区分により、Joshi (1985) や Azuma (1993) などの「開かれた文法項目」と「閉じられた文法項目」という品詞による区分を乗り越えようとした。Myers-Scotton (2002) によると、後者の区分では分析単位が明確ではなく、また発話プロセスにおいていかに別の言語が出現するかを説明することが困難であるという問題があった。新たな区分により、たとえば、それまでは閉じられた文法項目とされてきた前置詞は、使用のされ方によって区分されるようになった。これまでと同様、「book of Alice」の「of」や、「I live on Buchanan Street」の「on」のように、主題的役割をもたないまたは主題的役割が低い前置詞はシステム形態素とされるが、inside や outside のようにそれだけで主題的役割をもつ前置詞は内容形態素として捉えられるようになったのである (Myers-Scotton, 2006)。

それでは、以上の2つの特徴を軸とした MLF モデルがいかに文内コードスイッチングを捉えたかをみていこう。

まず ML となる言語がいかに決定され、いかなる機能を果たすかについてである。ML は、文の基盤となる言語である。ML となる言語は、Myers-Scotton (1992) によると、「形態素の順番の原則 (The Morpheme Order Principle)」と「システム形態素の原則 (The System Morpheme Principle)」により決定される。「形態素の順番の原則」は、表層レベルにおける形態素の配置は ML に従うと定める。そのため、各言語の文法を守ろうとして二言語の要素がぶつかる場合には、ML の要素が優先される。「システム形態素の原則」は、主部の要素 (head constituent) と外的に文法関係をもつ、すべてのシステム形態素は ML であることを定める。システム形態素として EL が使用される例も観察されるが、それについては後述する。

EL は ML で構築されたフレームに挿入される語句を指すが、ほとんどは内容形態素である。Myers-Scotton (1992) は、EL を、ひとつの形態素から成るタイプと、複数の形態素から成る「EL の島 (EL island)」に区分している。そして、EL は ML に挿入される。ただし、EL の挿入には制約がある。Myers-Scotton (1992) は「ML ブロック仮説 (The ML Blocking Hypothesis)」を提唱し、EL 形態素はフレームとなる ML に適合しなければ挿入されず、EL は ML に相当する語や形式であることを述べた。しかしその後、挿入される EL は必ずしも ML の相当語とは限らないことを認識し、Myers-Scotton & Jake (1995) は ML ブロック仮説を拡張して EL がどんな形式であれ、ML に「十分な一致 (sufficient congruence)」をすれば、挿入されることが可能となると述べた。

つまり、ひとつの EL 形態素が ML の相当語であり ML に一致する場合、EL はそのまま ML に挿入される。ただし、ひとつの EL 形態素が、必ずしも ML の相当語でありかつ ML に一致するとは限らない。その場合、いくつかの EL 形態素が結びつき、ML に十分に一致する形式にまとめられる。これが「EL の島」である。「島」の内部は EL の文法に従い、内

容形態素のみで構築されるものもあれば、内容形態素とシステム形態素が組み合わされて構築されるものもある。つまり島内部では、前述した ML を決定する「形態素の順番の原則」および「システム形態素の原則」は適用されず、EL 言語の語順に従い、EL のシステム形態素が用いられる。そのため、文の周辺的な要素（たとえば前置詞句）や定式表現などが、EL の島となることが多い (Myers-Scotton, 1992)。

以上を踏まえ、ML から成る文にどのように EL が挿入され、文内コードスイッチングが起こるかを具体的にみていこう。まずは EL が 1 つの場合である。(3)は、スワヒリ語を ML とする文に、英語が EL として挿入された、コードスイッチング文である。

(3) Ilikuwa comment. (Myers-Scotton, 1992)

It was just (a) comment.

(3)の文では、形態素がスワヒリ語の語順に従って配置され（形態素の順番の原則）、システム形態素にスワヒリ語が使用される（システム形態素の原則）ため、ML はスワヒリ語である。そして英語の内容形態素「comment」が EL として、ML であるスワヒリ語の統語構造に適合され挿入されている。

次は、「EL の島」が用いられた文内コードスイッチングである。「EL の島」とは、EL の文法構造をもち、複数の EL 形態素からなる。(4)は、ルイヤ語² (Luyia) を ML とする文に、英語が EL の島として挿入された、コードスイッチング文である。

(4) Okhujia Khu milimo ndumisilanga a company vehicle.

to go to work I use

(Myers-Scotton, 2006)

(4)の文では、形態素がルイヤ語の語順に従って配置され（形態素の順番の原則）、システム形態素にルイヤ語が使用される（システム形態素の原則）ため、ML はルイヤ語である。そして、英語の名詞句「a company vehicle」が EL の島として挿入されている。この名詞句は、3 つの形態素から成り（2 つの内容形態素と 1 つのシステム形態素）、英語の文法構造に従っている。そのため、島の内部では、ML を決定する「形態素の順番の原則」および「システム形態素の原則」は順守されていない。

その後、MLF モデルは、Levelt (1989) を参照して、発話プロセスにおいていかに EL が出現するかを説明した「抽象レベルモデル (Myers-Scotton & Jake, 1995, 2001)」、および 4 タイプの形態素がいかに発話プロセスにおいて出現し EL となるかを説明した「4-M モデル (Myers-Scotton & Jake, 2001)」を下位モデルとして拡大され、文内コードスイッチングを説明している。

本研究は、以上述べてきた発話プロセスモデルに基づき、学齢期前後の同時バイリンガ

² ルイヤ語とは、ケニアのビクトリア湖北東岸、ウガンダとの国境に近い地域で話されるパントゥ系の一連の言語の総称である (言語学大辞典, 1988)。

ルの子どもの発する文内コードスイッチングの特徴を分析する。Joshi (1985) が言語を ML と EL に区分したことに基づき、Azuma (1993, 1998) や Myers-Scotton (1992) は発話プロセスモデルを拡大し、文内コードスイッチングの説明を試みてきた。この 2 つのモデルは多くの点において類似しているが、分析の単位として、フレーム内容仮説は品詞を、MLF モデルは形態素を用いるという違いがある。MLF モデルは形態素を大きく内容形態素とシステム形態素に分けるが、それは文内コードスイッチングを詳細に分析することを可能とする。たとえば、複数の形態素からなる EL の島がいかに構築されているかという点や、いかに ML と EL が組み合わせられるかという点 (4-M モデルによりシステム形態素をさらに 3 区分している) などを明らかにすることができる。一方、品詞は、EL そのものを大きな視点から捉えることを可能とする。本研究は、文内コードスイッチングの特徴を捉えることが目的であるため、まずは品詞を用いて分析³、複数の形態素からなる EL の島など、より詳細な分析を行う場合に形態素を単位として使用することとする。

3. 調査方法

本章は、データ、参加者、分析方法から調査の方法について述べる。

3.1. データ

データは、家庭における家族間の自然会話から構築したコーパスである。食事時を中心に、家族ごと 1 時間半から 2 時間程度の会話を数回に分けて録音した⁴。その後、録音された会話に基づき、コーパスを構築した。

3.2. 被験者

被験者は、バンクーバーに在住する 4 家族⁵6 人の子どもである。父親はカナダで生まれ育った英語母語話者、母親は日本で生まれ育った日本語母語話者である。子どもが生まれた時から、父親は英語、母親は日本語で子どもに話しかけており、子どもたちは 2 つの言語に同時に接触してきた「同時バイリンガル」である。なお、子どもたちは英語圏であるバンクーバーで生まれ育ち、日本に長期的に住んだ経験はない。

6 人の子どものうち、4 人は小学校に通う就学児であり、2 人は未就学である。表 1 に、家族ごとの子どもの就学状況をまとめた。

³ ただし、複数語の場合は品詞のみでは捉えきれないため句という区分を用いる。

⁴ 前もって渡しておいた IC レコーダーを用いて、各家庭の母親が録音をした。

⁵ 便宜的に、家族 A、家族 B、家族 C、家族 D と呼ぶ。

表1 子どもの就学状況

家族 A	家族 B	家族 C	家族 D
就学児 (A-G5 ⁶)	就学児 (B-G3)	就学児 (C-G1)	未就学児 (D-4yrs)
就学児 (A-G2)		未就学児(C-4yrs ⁷)	

6人の子どもたちは同時バイリンガルではあるが、英語と日本語への接触パターンが異なることに注意しておきたい。英語は社会や学校などの日常生活において使用されるが、日本語は家庭での使用（特に母親とのやりとり）と、週に1度通う日本語学校での学習における使用に限られる。さらに、未就学児はほとんどの時間を家庭で過ごす。就学児は家庭と英語が教授言語である小学校で多くの時間を過ごす。この現状から、子どもたちの英語と日本語の能力はそれぞれ異なったレベルで発達していることが想定される。それは、文内コードスイッチングに影響を与える可能性もある (cf. Myers-Scotton, 2001)。

3.3. 分析方法

本研究の目的は、文内コードスイッチングの特徴を明らかにすることである。そのため分析単位は文である。コーパスには、表2に示す情報を付けた。

まず、「話し手」である。これにより、誰が文内コードスイッチングを発したかを示す。

次に、各文において使用された「言語」である。英語または日本語だけが一文に使用された「一言語のみ」か、または英語と日本語が一文に使用されている「二言語」かに分類した。ただし、ユニリンガルも用いるような「確立された借用語」⁸ (cf. Poplack, Sankoff, & Miller, 1988; Myers-Scotton, 2006) はすでにその言語に導入されて使用されているため EL とは捉えず（つまり、文内コードスイッチングとは捉えず）、一言語のみの使用とした。

そして、文内コードスイッチングが行われた文、つまり「二言語使用」文に、その特徴を把握するための情報を付けた。まず、ML と EL として使用された言語の組み合わせであり、具体的には、「ML：日本語・EL：英語」または「ML：英語・EL：日本語」となる。

次に、EL の分析を進めるため、ひとつの形態素から成る「EL」、複数の形態素から成る「EL の島」を区別するための情報を付けた。一文に複数の EL や EL の島が含まれる場合には、すべて明記した。

EL 内部は以下のように分析する。まず、ひとつの形態素から成る EL は、品詞を明らかにする。そして、複数の形態素から成る EL の島がどのような句を構成しているか、品詞および形態素の点から明らかにする。表2には、先行研究などで指摘された品詞や句である「名詞」、「動詞」、「形容詞」、「副詞」、「ディスコースマーカー」を挙げてあるが、「その他」の品詞や句が見出されれば新たに付け加える。

⁶ A-G5とは、「家族A、小学校5年生 (Grade 5)」を意味し、以下ではこの名称を用いる。A-G2, B-G3, C-G1もこの方式に準ずる。

⁷ C-4yrsとは、「家族C、4歳 (4 years)」を意味し、以下ではこの名称を用いる。D-4yrsもこの方式に準ずる。

⁸ ただし、「確立された借用語」を一義的に決めることは難しい。言語知識は個人により異なるためである。そこで、社会において一般的に使用されるかどうかという点から筆者が判断したが、判断に迷う語はほとんどなかった。

以上の方法に基づいて分析を行う。

表2 コーパスに付けた情報

情報項目	具体的な情報	対象となる文
話し手	A-G5, A-G2, B-G3, C-G1, C-4yrs, D-4yrs その他（各家族の両親）	全文
使用した言語	・一言語のみ ・二言語（英語と日本語）	全文
ML と EL の 組み合わせ	・ML: 日本語, EL: 英語 ・ML: 英語, EL: 日本語	二言語 使用文
EL と EL の島	・EL ・EL の島	二言語 使用文
EL の品詞	・名詞 ・副詞 ・動詞 ・ディスコースマーカー ・形容詞 ・その他	EL 挿入文
EL の島の句	・名詞句 ・前置詞句 ・動詞句 ・その他 ・形容詞句	EL の島 挿入文

4. 結果と分析

本研究の目的は、学齢期前後の同時バイリンガルの子どもたちが発した文内コードスイッチングの特徴を明らかにすることである。まず文内コードスイッチングの比率と言語の組み合わせについて、その後挿入される要素である EL について分析をする。

4.1. 文内コードスイッチングの比率と言語の組み合わせ

子どもたちは、文内コードスイッチングをどの程度行うのであろうか。文内コードスイッチングの頻度を算出するとともに、コードスイッチングが行われた文が発話文の総数に占める比率を全体および個人ごとに算出した。そのため、一文に複数の EL が挿入されている場合もひとつとする。結果は表3に示すとおりである。

表3 発話に占める文内コードスイッチング

	頻度	比率
全員	138	4.1%
A-G5	11	1.7%
A-G2	24	4.7%
B-G3	44	6.3%
C-G1	24	3%
C-4yrs	22	5.2%
D-4yrs	13	4%

文内コードスイッチングが行われた平均比率は4.1%であり、かつ6人すべて比率は低い。つまり、子どもたちは一言語から成る文を構築することがほとんどである。

ただし、本研究のコーパスは自然会話から成り、子ども自身が ML となる言語を決定していた⁹。そのため、EL を使わなくてもすむように ML を選択していた可能性も考えられ、この結果は、子どもたちがひとつの言語のみで文を生成する能力を 2 つの言語において発達させていることを必ずしも示すわけではない。

次に、文内コードスイッチングの言語の組み合わせについてである。発せられた文内コードスイッチングを、「ML：日本語・EL：英語」の組み合わせと「ML：英語・EL：日本語」の組み合わせに分けてそれぞれ頻度を算出し、その後文内コードスイッチングに占めるそれぞれの比率を、全体および個人ごとに算出した。なお、文のフレームに用いられた言語、つまり ML の判断が困難なものは「不明」として全体の数値から除いてある¹⁰。結果は表 4 に示すとおりである。

表 4 ML と EL の組み合わせ

	ML: 日本語 EL: 英語	ML: 英語 EL: 日本語
全員	90.2% (117)	9.8% (19)
A-G5	81.8% (9)	18.2% (2)
A-G2	58.3% (14)	37.5% (9)
B-G3	88.4% (38)	11.6% (5)
C-G1	87.5% (21)	12.5% (3)
C-4yrs	100% (22)	0% (0)
D-4yrs	100% (13)	0% (0)

子どもの発した文内コードスイッチングの 9 割は、「ML：日本語・EL：英語」の組み合わせであった。これは、日本語が文のフレームであり、英語が EL として挿入されるパターンである。一方、ML が英語である文に、日本語が EL として出現するパターンは 1 割と少ない。この傾向は、A-G2 を除く子どもたちに共通していた。A-G2 が発した文内コードスイッチングの 4 割は、「ML：英語・EL：日本語」という組み合わせであった。

それでは、例文を通して、発せられた文内コードスイッチングを具体的にみていこう。

(5) これ全部、same day にした。 (A-G2)

(6) Because it's 野菜. (A-G2)

⁹ 一般的に、一文の中に別の言語を用いることは言語の規範という観点から望ましくないと捉えられることが多く、子どもに文内コードスイッチングを注意する親も少なくない (cf. Baker, 2000)。本コーパスからはそのような場面は見出されなかったが、文内コードスイッチングを避ける習慣を子どもたちが身に付けていることも考えられる。

¹⁰ 具体的には、A-G2 に 1 文、B-G3 に 1 文、「不明」とした文があった。

両文とも、A-G2の発話である。(5)は「ML:日本語・EL:英語」で組み合わせられており、日本語から成る文のフレームに、名詞句「same day」がELとして英語で挿入されている。一方、(6)は「ML:英語・EL:日本語」で組み合わせられており、英語から成る文のフレームに、名詞「野菜」がELとして日本語で挿入されている。

ここで、なぜA-G2のみ「ML:英語・EL:日本語」の組み合わせの比率が高いのかを考えておく必要がある。コーパス全体において、一言語のみの発話文を含めても、A-G2が日本語をMLとする文を発する比率は低かった¹¹。そのため、A-G2はMLが英語であっても日本語をELとして挿入することで、A-G2が日本語を使用することを期待する母親に配慮していたことが考えられる。また、A-G2には日本語学習を母親とする状況で録音された会話があったが、その中でも英語をMLとする文を数多く発していた。日本語に方向付けられている状況であったため、日本語をELとして挿入することが多くなったのではないかと考えられよう。

文内コードスイッチングにおける言語の組み合わせが異なることは、シンガポールで家庭において英語と広東語に同時に接触してきた男児(3歳から5歳の期間)の言語使用を分析したKwan-Terry(1992)も指摘しており、本研究の結果と一致する。Myers-Scotton(2001)によると、二言語間の能力差がある場合、能力が低い言語の文に能力が高い言語がMLとして埋め込まれることが多い。本研究の被験者の子どもたちは、誕生より英語と日本語に接触しているが、英語圏で生活しているため英語を使用する機会が多く、日本語への接触は家庭や日本語学校が中心である。そのため、英語能力の方が日本語に比べて概して高く、文内コードスイッチングが日本語をMLとする文に英語がELとして出現するパターンが多かったと考えられる。ただし、文内コードスイッチングを行った比率は平均4.1%と低く、日本語と英語の能力差は存在するにせよ、日本語の能力が低いことを意味するわけではない。また、ELとして使用した語句に日常的に英語で接触しているため、日本語の語句よりもアクセスしやすく英語のまま使用したことも影響しているだろう。

4.2. ELの特徴

本節では、挿入される要素であるELに着目して分析を行う。まず、ELとELの島の使用比率の相違を明らかにする。文内コードスイッチングに含まれるELおよびELの島の数を全員および個人ごとに算出した。そのため、一文に複数のEL・ELの島が出現した場合は、それぞれをひとつのEL・ELの島として数える。結果は表5に示すとおりである。

¹¹ 詳細は、時田(2009)を参照のこと。

表5 EL と EL の島の比率

	EL	EL の島
全員	71.6% (116)	28.4% (46)
A-G5	83.3% (10)	16.7% (2)
A-G2	75% (21)	25% (7)
B-G3	65% (39)	35% (21)
C-G1	72% (18)	28% (7)
C-4yrs	79.1% (19)	20.9% (5)
D-4yrs	69.2% (9)	30.8% (4)

子どもが発した文内コードスイッチングには、EL が 71.6%、EL の島が 29.4%用いられ、EL が全体の 3 分の 2 程度を、EL の島が 3 分の 1 程度を占めた。少々ばらつきも観察されるが、全員 EL が多くを占めている。ここから、ひとつの形態素のみから成る EL の方が、挿入されやすいといえる。EL が ML に「十分な一致 (Myers-Scotton & Jake, 1995)」をしていることが挿入の条件であり、複数の形態素から成る EL の島よりもひとつの形態素の方が扱いやすいからと考えられよう。

以下は、EL と EL の島が挿入された例文である。

- (7) みんな、あの、えーと、Tuesday five o'clock、から、Wednesday の twelve o'clock、ずーっと話せない。(B-G3)
- (8) beans も入ってたもん。(C-G1)

両文とも、「ML:日本語・EL:英語」という組み合わせの文内コードスイッチングである。(7)は B-G3 の発話文であり、EL も EL の島も含まれている。ひとつの形態素から成る EL は「Wednesday」、複数の形態素からなる EL の島は「Tuesday five o'clock」(3つの形態素)および「twelve o'clock」(2つの形態素)である。(8)は C-G1 の発話文であり、EL の島「beans」が英語で挿入されている。「beans」は1語であるが、内容形態素「bean」と複数を示すシステム形態素「s」が組み合わせられており、2つの形態素から成る。

次は、EL についてである。EL の品詞を捉え、EL がいかに使用されているかを示す。観察された EL すべてを品詞に分け、全員および個人ごとに総数と比率を算出した。結果は表 6 に示すとおりである。

表6 EL に用いられた品詞

	名詞	動詞	DM	形容詞	疑問詞	合計
全員	73% (84)	12.2% (14)	7.9% (9)	4.3% (5)	2.6% (3)	100% (115)
A-G5	7	0	1	1	1	10
A-G2	12	1	3	3	2	21
B-G3	23	10	5	1	0	39
C-G1	18	0	0	0	0	18
C-4yrs	17	2	0	0	0	19
D-4yrs	7	1	0	0	0	8

子どもが、EL に使用した品詞として、名詞 (73%)、動詞 (12.2%)、ディスコースマーカ― (7.9%)、形容詞 (4.3%)、疑問詞 (2.6%)が見出された。名詞、動詞、形容詞は内容形態素であり、内容形態素が EL となりやすいことを指摘した Myers-Scotton (2006) の見解と一致する。さらに、Azuma (1998) は EL が意味的に自立していることを述べていたが、上記の 3つの内容形態素のみならず、ディスコースマーカ―と疑問詞も意味的に自立した品詞であり、EL の意味的自立性が確認された。

EL の品詞のうち 73%は名詞であり、他に比べて圧倒的に高い比率を占める。名詞がもっとも挿入されるという見解は、英語とノルウェー語ペアを分析した Poplack et al. (1990) や、英語と日本語ペアを分析した Nishimura (1997) なども指摘しており、本研究の結果もそれらと一致する。それ以外は、動詞が 12.2%、ディスコースマーカ―が 7.9%、形容詞が 4.3%、疑問詞が 2.6%と順に続いている。

それでは、例文をみてみよう。

(9) 海賊の story。 (C-4yrs)

(10) そしたら white に change。 (B-G3)

両文とも、「ML : 日本語・EL : 英語」の組み合わせの文内コードスイッチングである。(9) は C-4yrs の発話文であり、英語名詞「story」が EL として挿入されている。(10)は B-G3 の発話文であり、英語名詞「white」と英語動詞「change」が 2つ EL として挿入されている。

次に、EL の島について、発せられた EL の島がどのような特徴をもつかを分析する。観察された EL の島すべてを句に分類し、全員および個人ごとに総数と比率を算出した。結果は表 7 に示すとおりである。

表7 EL の島に用いられた句

	名詞句	前置詞句	その他	合計
全員	87% (40)	4.3% (2)	8.7% (4)	100% (46)
A-G5	2	0	0	2
A-G2	7	0	0	7
B-G3	19	0	2	21
C-G1	7	0	0	7
C-4yrs	3	2	0	5
D-4yrs	2	0	2	4

EL の島としてもっとも使用されたのは名詞句であり、87%を占めた。それ以外はわずかであり、前置詞句 (4.3%) などが観察されている。EL の島も EL と同様、意味的自立性をもっている (Azuma, 1998) ことが確認される。

それでは、例文をみてみよう。

(11) すごいもう<3> no time だった。 (C-4yrs)

(12) その時は<2> sixteen dollar 払った。 (B-G3)

(13) 下の skating class でおんなじの子。 (C-G1)

3 つの文とも、「ML：日本語・EL：英語」の組み合わせからなる文内コードスイッチングであり、EL の島が名詞句として英語で挿入されている。(11)は C-4yrs の発話文であり、EL の島「no time」が英語で挿入されている。EL の島が挿入される直前に3秒ほどポーズが置かれているが、このポーズは、MLである日本語で続けたかったものの、意図することが日本語で表現できず、英語の相当語をELとして挿入したため生じたと考えられる。そしてC-4yrsは日本語ではなく、ELとして英語「no time」を挿入するが、その後この名詞句に適切に続く形式として、日本語「だった」を用いている。(日本語では「時間がなかった」となり、その場合「だった」は用いられない。) Myers-Scotton & Jake (1995) によると、EL (EL の島) は、MLに十分に一致する形式で挿入されねばならないが、それはELの形式がMLとなるフレームの構築に影響を与えることを示唆する。

(12)はB-G3の発話文であり、日本語の文にELの島「sixteen dollar」が英語で挿入されている。(13)と同様、この名詞句の直前に2秒ほどポーズが置かれている。MLと同じ日本語で「16ドル」と発したかったものの表現できず、英語の相当語をELとして挿入したと考えられる。なお、このELの島は、英語の複数形を示すシステム形態素「s」が落ちていることに注意しておきたい(英語では、「sixteen dollars」が適切)。これは、述語項構造(Myers-Scotton & Jake, 1995; 2001)の構築の際に「s」が付け損ねられたため生じたと考えら

れる。

ただし、EL の島は必ずしもポーズを伴うわけではない。C-G1 の発話文である(13)では、英語「skating class」が名詞句として挿入されている。EL の島であるこの名詞句は、(11)や(12)と同じ形式をとるが、ポーズはなく挿入されていた。

以上、EL について分析した。EL は、ひとつの形態素のみから成る EL と、複数の形態素から成る EL の島に分けられる (Myers-Scotton, 1992)。同時バイリンガルの子どもが発した文内コードスイッチングのうち、EL が 7 割、EL の島が 3 割であった。また、EL および EL の島として用いられた品詞は名詞または名詞句が多かった。つまり、Azuma (1998) の提唱する「自立の原則」が適用されている。また、名詞が挿入されやすいことは、Poplack et al. (1990) や Nishimura (1997) も指摘しており、本研究の結果と一致する。なお、EL の島は複数の形態素から成るが、「skating class」「cotton candy」のように、形態素間の結びつきが強くひとつの概念として機能しているものが多い。これらは定型表現として記憶されている (Wray, 2002) とも考えられよう。

5. 結論

本研究は、バンクーバーに住む日本語と英語の「同時バイリンガル」である学齢期前後の子どもたちが発した、文内コードスイッチングの特徴を分析した。その結果、①文内コードスイッチングが行われる比率は低い、②言語の組み合わせは、「ML が日本語・EL が英語」のパターンとなることがほとんどである、③EL の方が EL の島より多い、④EL・EL の島は、名詞・名詞句となることが多い、ことが見出された。

今後は、同時バイリンガルが発する文内コードスイッチングが年齢とともにいかに変わるのか、被験者の年代を第一言語習得期である 2-4 歳時および思春期に当たる 10 代前半に変えて比較をして明らかにしたい。それは同時バイリンガルの子どもがいかに言語を発達させているかを示すことにつながるであろう。

参考文献

- 東照二 (2009) 『社会言語学入門 (改訂版) ー生きた言語のおもしろさに迫る』, 研究社.
- 時田朋子 (2009) 「家族の言語使用パターンが子どものバイリンガリズムに及ぼす影響: 社会におけるマイノリティ言語を中心に」, 『コーパスに基づく言語学教育研究報告』2: 13-37, グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科.
- Azuma, S. (1993) "The frame-content hypothesis in speech production: Evidence from intrasentential code-switching", *Linguistics* 31: 1071-1093.
- Azuma, S. (1998) "Meaning and form in code-switching", In R. Jacobson (Ed.), *Codeswitching worldwide*: 109- 123. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Baker, C. (2000) *A parents' and teachers' guide to bilingualism* (2nd ed.). Clevedon: Multilingual

Matters.

- DiSciullo, A. M., Muysken, P., & Singh, R. (1986) "Government and code-mixing", *Journal of Linguistics* 22: 1-24.
- Garrett, M. F. (1982) "Production of speech: Observations from normal and pathological language use", In A. W. Ellis (Ed.), *Normality and pathology in cognitive functions*: 19-76. New York: Academic Press.
- Genesee, F. (1989) "Early bilingual development: One language or two?", *Journal of Child Language* 16: 161-179.
- Grosjean, F. (1992) "Another view of bilingualism", In R. J. Harris (Ed.), *Cognitive processing in bilinguals*: 51-62. Amsterdam: North Holland.
- Jacobson, R. (1998) "Conveying a broader message through bilingual discourse: An attempt at contrastive codeswitching research", In R. Jacobson (Ed.), *Codeswitching worldwide*: 51- 76. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Joshi, A. (1985) "Processing of sentences with intrasentential code switching", In R. David, L. K. Dowty & Z. Arnold (Eds.), *Natural language parsing*: 190-205. New York: Cambridge University Press.
- Kwan-Terry, A. (1992) "Code-switching and code-mixing: The case of a child learning English and Chinese simultaneously", *Journal of Multilingual and Multicultural Development* 13: 243-259.
- Levelt, W. J. M. (1988) *Speaking: From intention to articulation*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- M'Barek, M, N., & Sankoff, D. (1988) "Le discours mixte Arabe/Français: Emprunts ou alternances de langue?", *Revue Canadienne de Linguistique* 33: 143-154.
- Meisel, J. M. (1989) "Early differentiation of languages in bilingual children", In K. Hyltenstam & L. K. Obler (Eds.), *Bilingualism across the lifespan: Aspects of acquisition, maturity, and loss*: 13-40. Cambridge: Cambridge University Press.
- Myers-Scotton, C. (1992) "Constructing the frame in intrasentential codeswitching", *Multilingua* 11: 101-127.
- Myers-Scotton, C. (2002) "The matrix language frame model: Developments and responses", In R. Jacobson (Ed.), *Codeswitching worldwide II*: 23-58. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Myers-Scotton, C. (2006) *Multiple voices: An introduction to bilingualism*, Malden, Mass: Blackwell.
- Myers-Scotton, C., & Jake, J. L. (1995) "Matching lemmas in a bilingual language production model: Evidence from intrasentential codeswitching", *Linguistics* 33: 981-1024.
- Myers-Scotton, C., & Jake, J. L. (2001) "Explaining aspects of code-switching and their implications", In J. L. Nicol (Ed.), *One mind, two languages: Bilingual language processing*: 84-116. Malden, Mass.: Blackwell.
- Nishimura, M. (1997) *Japanese/English code-switching: Syntax and pragmatics*, New York: P. Lang.
- Pfaff, C. W. (1979) "Constraints on language mixing: Intrasentential code-switching and borrowing

- in Spanish/English", *Language* 55: 291-318.
- Poplack, S. (1980) "Sometimes I'll start a sentence in Spanish y termino en Español: Toward a typology of code-switching", *Linguistics* 18: 581-618.
- Poplack, S., & Meechan, M. (1995) "Patterns of language mixture: Nominal structure in Wolof-French and Fongbe-French bilingual discourse", In L. Milroy & P. Muysken (Eds.), *One speaker, two languages: Cross-disciplinary perspectives on code-switching*: 199-232. Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- Poplack, S., Sankoff, D., & Miller, C. (1988) "The social correlates and linguistic processes of lexical borrowing and assimilation", *Linguistics* 26: 47-104.
- Poplack, S., Wheeler, S., & Westwood, A. (1990) "Distinguishing language contact phenomena: Evidence from Finnish-English bilingualism", In R. Jacobson (Ed.), *Codeswitching as a worldwide phenomenon*: 185-218. New York: Peter Lang.
- Woolford, E. (1983) "Bilingual code-switching and syntactic theory", *Linguistic Inquiry* 14: 520-536.
- Wray, A. (2002) *Formulaic language and the lexicon*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Yip, V., & Matthews, S. (2007) *The bilingual child: Early development and language contact*, Cambridge: Cambridge University Press.